
仮面ライダー スカルIN麻帆良～鋼鉄の意思を継ぐ者～

のんびり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダースカルIN麻帆良〜鋼鉄の意思を継ぐ者〜

【Nコード】

N4175R

【作者名】

のんびり

【あらすじ】

《仮面ライダー》

その深い哀しみを仮面に隠し、重き枷に正義の心を解き放つ者。

罪を重ね、罪を裁く者。

「さあ、お前の罪を数えろ」

骸の戦士は戦う。

何人であっても、止めることも砕くことも叶わぬ鋼鉄の『信念^{せいぎ}』を宿して。

第0話「Sの誇りと罪／その名はスカル」

燃え盛る村。

血と肉が散り、幾多の命が異形のモノ——魔族により奪われた。魔族たちは召喚されただけであり、命令のままに暴れているだけだ。

そして、その行いは『正義』と言って過言ではない。破壊している村は、世界を破滅に向かわせる存在を匿っているのだ。

襲撃した事実が公になっても、批難より称賛される声が圧倒的に多いはずだ。なのに——

「何故だ！？ 何故だ！？ 何故だ！？ 何故だ！？ 何故だあああ
っ！？」

魔族を召喚したある組織の男は、無くした右手を庇いながら必死に逃げていた。

「俺は英雄だぞ！？ 何故！？ 何故——」

「黙れ」

決して大きくはないが、不思議とよく響く重厚な声が聞こえた。その声には、静かなる怒りが込められていた。

「あっ！？ あっあああっ！！！？？」

男は恐怖の余りに錯乱した。

ソイツがいるということは、仲間全滅したのだろう。

ソイツは銀色に煌めく骸骨の頭部、黒の装甲を纏い、首にボロボロのスクーフを巻いている。

額の中央を走る『S』の模様を、白のソフト帽で隠す。

「いかなる理由があるとも、命を奪う者は咎人だ。その罪は、如何なる償いの方法も無い。背負い続けていくだけだ。地獄に堕ちる、その時まで」

黒の複眼が男を射ぬく。

その視線から逃げることは叶わない。

「俺は俺の罪を数えたぞ」

骸骨の戦士は右腕を真つすぐ伸ばし、親指を天に、人差し指を男に指し、残りの指を折り曲げた。

そして、告げた。

「さあ、その罪を数えろ」

「わあああああつ!!」

男は懐から出したナイフを無茶苦茶に振り回して、骸骨の戦士に突進した。

《Maximum Drive!!》

電子音が響き渡り、骸骨の戦士が空高く跳躍した。

そして、躍の最大到達点には、半透明で巨大な髑髏が顕現した。

骸骨の戦士は、それを蹴った。

「シルエットキック」

髑髏は恐るべき速度で迫り、男は悲鳴を上げる暇も無く、爆死した。

骸骨の戦士は、男の存在していた場所を一瞥すると、歩みを進めた。

まだやるべきことがある。

骸骨の戦士は、村の数少ない生き残りである赤毛の少年と対峙していた。

まだ6歳であり、戦う術の一つもない。

しかし、石化してしまった姉と慕う少女のために、身を犠牲にしても護るために、恐怖を無理矢理抑えて立ち塞がる。

その眼には、確かな強さが宿っていた。

「ふっ、さすがはあの男の息子だ。いい眼をしている」

「おっ、お父さんを知っているの!？」

「届け物だ」

骸骨の戦士は答えの代わりに、赤毛の少年にある物を渡した。

「この杖は……お父さんの杖！！　あなたはもしかして――」
「違う」

赤毛の少年を遮り、骸骨の戦士は言った。

「俺の名は鳴海荘吉。そして……」

骸骨の戦士は自動操縦で呼び寄せた漆黒のバイクに乗る。

「仮面ライダースカルだ」

「仮面ライダースカル……」

そう言い残し、村を去って言った。

赤毛の少年は、スカルが去っていた方角を長い時間見続けた。

第1話「Sの再来／鳴海探偵事務所」

日本、麻帆良市。まほろ

大型学園都市とも呼ばれ、市のそのものが学園である。

様々な研究機関を備え、小学校・中学校・高校・大学のエスカレーター方式をとる麻帆良学園は、その大きさは世界一を誇る。

また、裏の顔として『魔法』技術の研究・開発、魔法を使う『魔法使い』の教育・育成の場でもあった。

そんな麻帆良学園だからこそ、世にも奇妙な事件が割と頻繁に起きている。

その中でも、特に性質の悪い事件には『ガイアメモリ』や『ドーパント』、という単語が必ずと言っていい程に出てくる。

警察や魔法使いたちでもさじを投げるこついった事件を通称『ガイアメモリ事件』と呼び、人々に不安を与えていた。

しかし、闇あるところに光あり。

麻帆良にはガイアメモリ事件を数多く解決し、人々から最も頼りにされる男——『なるみそつ鳴海莊悟』が居る。

鳴海探偵事務所。

『風都』と呼ばれるエコの街で、実の姉——『なるみあき鳴海亜樹子』——

が所長を務める探偵事務所を創設した男——鳴海莊悟の父『なるみそつ鳴海莊きち』——

吉——が開設したもう一つの探偵事務所。

こちらは、若き探偵の莊悟が所長兼探偵をやっていた。そして、風都にある探偵事務所と造りは非常に似ている。

カモメビルと呼ばれる場所に、一階が喫茶店があり、二階が鳴海探偵事務所となっている。早朝6時。

莊悟は、部屋の角にある仕事机の椅子に座り、コーヒーを片手に新聞を読んでいた。

その姿は実にさまになっている。

整った容姿より、とても16歳とは思えぬ程の落ち着きと滲み出る貫禄が莊悟という人間を引き立てていた。

16歳の莊悟であるが、彼を『少年』として扱う者は少ない。己の信念と責任で動く『男』として信頼されているからだ。

「おはよう、莊悟！」

「おはよう」

探偵事務所の扉が開き、一人の少女が元気よく挨拶をした。

少女の名は——神楽坂明日菜。

麻帆良学園中等部に通う14歳の少女。

オッドアイで運動神経抜群であるが、勉強が苦手である。

「こんなのが表にあつたわよ」

「ん？」

莊悟は明日菜から渡された紙袋を受け取り、ナイフで封を空けた。来客用のソファに座り、机に中身を広げた。

「ガイアメモリ？」

「いや、どうやら違うようだ」

莊悟も持つUSBのようなモノ——ガイアメモリと酷似しているが、付属された説明書には『ギジメモリ』と書かれてあった。

　　「超人形態へと至ることは叶わない。だが——」

　　ガイアメモリはそれぞれ『地球の記憶』を内包している。

　　ガイアメモリを起動させて自身に挿す、或いは『ドライバー』と呼ばれるモノにより『変身』することで、『超人』となることができるのだ。その力は絶大であり、メモリにより差はあるが身体能力は爆発的に上昇し、物理的衝撃や魔法衝撃に強くなる。

　　「メモリガジェットを起動させ、ライブモードに変形させることができる、か」

　　それぞれ形が特殊な携帯電話、腕時計、デジタルカメラ——メモリガジェット——が机には広げられている。

　　明日菜はそれらを珍しそうに手に取っていた。

　　莊悟は説明書を読み終わると、ギジメモリとメモリガジェットを注意深く調べた。

　　「これ、使ってみていい？」

　　「待て。まずは俺が使っ。何が起こるかわからないからな」

　　莊悟は一本のギジメモリを起動させた。

《BAT!》

　　ガイアウィスパーの電子音声が響くと、デジタルカメラ型メモリガジェットのメモリスロットにバットギジメモリを挿した。

　　すると、デジタルカメラがまるでコウモリのような形に変形して、

空を舞う。

「凄い！ どうなってるの？」

「さあな」

莊悟は人並み以上に機械の知識を持つが、『ガイアメモリ』といったオーバーテクノロジーに関しては流石に解らない。

ガイアメモリに関しては、無駄に考えるより風都にいる『検索好きの少年』に聞いたほうが賢明だろう。

「他のやつも起動させていい？」

「ああ」

明日菜は二本のギジメモリを手にとり、起動させた。

《SPIDER!》《STAG!》 それぞれのメモリスロットにギジメモリを挿すと、時計がクモ型、携帯電話がクワガタ型に変形した。

「なになに・・・コウモリがバットショット、クモがスパイダーショット、クワガタがスタックフォン・・・へえ、便利そうね」
「それぞれメモリガジェットは二つずつある。ギジメモリとメモリガジェットは君が持て」

「え？ いいの？」

「ああ。俺はメモリガジェットがあればいい。何かあった時、最低限の護衛は勤めてくれるはずだ」

探偵業というのは何かと危険を伴う。

それは、バイトとして働く明日菜にも同様である。

明日菜の運動神経・身体能力の高さは莊悟も認めているが、こと戦闘になれば彼女は素人。　莊悟は何かあった時には「戦わず逃げろ」と明日菜に常々言っている。

「わかった。借りとくね」

明日菜がギジメモリとメモリガジェットをしまつと、玄関のドアが叩かれた。

「すみません。誰かいますか？」

「あつ、はい！　どうぞ！」

明日菜はドアを急いで開けると、そこにはスーツ姿の20代前半の女性がいた。

彼女の名は村瀬美香。

魔帆良学園大学の生徒である。

莊悟への依頼は、スーカーに関することであつた。

「最近視線を感じるんです。勘違いと思つていたんですけど、どうしても気になつて警察に相談したんですが・・・何の問題も無いって言われました。だけど・・・」　美香はバックから複数の写真を取り出した。

そこにはどれも、マンションの一室が写されていた。

そして、その何枚かには美香が写っていた。

その目線は有らぬところにある。

つまり――

「盗撮ですね」

「盗撮！？」

莊悟は冷静に、明日菜は驚愕した。

「はい。送られてきた物の中には下着姿の物もありました。怖くなくて、何人かの探偵さんに調査を依頼したのですが・・・『何一つ』の手がかりも掴めませんでした」

「何一つ、ですか？」

「はい、探偵さんたちも不思議がっていました。ですから、こういつた不思議な事件は鳴海探偵事務所に行けば何とかなるって人づてに聞いて。お願いできますか？」

「分かりました。その依頼お受けしましょう」

「よろしく願います！」

第2話「Sの再来／お前の罪を数えろ」(前書き)

ハードボイルドって難しいなあ〜

第2話「Sの再来／お前の罪を数えろ」

依頼を受けた鳴海莊悟は、情報屋である男と路地裏で接触していた。

彼は『ウオッチャー』と呼ばれていた。

そして、彼の本名も年齢も誰も知らない。

ただ、その情報が正しい事だけが知られていた。

「間違いないのか？」

「莊悟くんを読み通りだよ。流石だよ」

「そうか、助かる。情報料はいつもの口座に振り込んでおく」

莊悟はウオッチャーと別れ、バイク——スカルボイルダー——の横で待機していた明日菜と合流した。

「お帰り。どうだったのよ？」

「大方、当たりだ」

明日菜からヘルメットを受け取り、ソフト帽を仕舞うとスカルボイルダーに乗った。

「そう」

明日菜はそう言うと、それ以上聞かずにヘルメットを被って莊悟の後ろに乗った。

わずか数ヶ月の付き合いであるが、明日菜は莊悟が無駄口を叩くような性格で無いことを知っていた。

——如何に誤解されようとも。

——如何に怨まれようとも。

彼が話さないなら、どんな事をしても話さない。
だから、明日菜は莊悟に無駄な質問はしない。
必要ならば莊悟は語ってくれる。

「出すぞ」

莊悟はスカルボイルダーを発進させる。
スカルボイルダーはオーバーテクノロジーの塊であるガイアメモリ程ではないが、一部でオーバーテクノロジーが使用されている。
そのため、通常的大型バイクの倍以上の馬力も速度もある。

（さて、どうしたものか……）

莊悟は考えていた。

（読み通りだったのはいいが……）

今回の事件はただのストーカー事件では無いことを、莊悟は正しく捉えていた。

確信はあった。

彼女は失敗を犯していた。

それは彼女が見せた写真だ。

何十枚とあった写真の中で数枚であったが、彼女の目線が撮影者に気が付いているものがあった。

それはほんの僅かな違い。

明日菜は見逃しても、莊悟の優れた洞察力は見逃さなかった。

それに、彼女は何か違和感があった。

それが何かという事までは解らない。

しかし、莊悟の直感は激しく訴えている。

油断するな、と。

（この依頼・・・きな臭くなってきたな）

人混みの中を颯爽と風を切るスカルボイルダー。

《——学園の皆さん。始業ベルまで30分です。余裕を持った行動を心がけましょう》

校内放送が入る。

まだ始業まで時間があり麻帆良学園都市の中でも一番奥にある女子校エリアであっても、その人混みは尋常ではない。

（ん・・・？）

そして、その中からこちらを『視ている者』がいた。
その視線は悪意を放つ。

しかも、その悪意は『より淀んでいた』。
その意味するところは——

（朝から騒しいな）

莊悟はスカルボイルダーをゆっくりと減速させ停止させた。

「どうしたの？」

「悪いが客だ。俺向きの、な」

その言い回しから、明日菜は莊悟の言わんとした事がわかった。

「まさかドーパント!?」「そういう事だ。悪いがここでお別れだ」
「わかったわ。気をつけてね」

明日菜はスカルボイルダーから降りた。
莊悟はアクセルを吹かすと、スカルボイルダーを加速させた。

明日菜と別れた莊悟は、人がいない森の中へと移動していた。
スカルボイルダーは時速60キロで走っているが、『淀んだ悪意』
はこちらに着いて来ている。
周囲に誰もいない事を確認した莊悟は、スカルボイルダーを止めた。

ヘルメットを脱ぎ、白のソフト帽を被る。

「待たせたな、レディ美香」
「フフツ、気が付いての？」

森の中からは村瀬美香が出てきた。
その眼は興奮で血走っていた。

「ああ。あんたがストーカーや探偵を『殺した』こともな」

莊悟がウオッチャーから得た情報は、村瀬美香が依頼した探偵たちの事だ。

一人だけなら、その者が無能だったと言われても納得できる。

彼女が言った通りなら少なくとも十名以上の探偵に依頼して、その誰もが『何の情報を掴めなかった』のは変だと思ったからだ。掴めなくて当然だ。

犯人は死んでいるのだから。

そして、彼らは例外なく『行方不明』となっていた。

「あら、ばれちゃった」 美香はあっけらかんとして言った。

「だってしょうがないでしょ？ 私をストーカーした男も、ストーカーを捕まえられなかった無能な探偵も死んで当然じゃない。だから――」

美香は胸ポケットからガイアメモリを出す。

「食べてあげたの……！」

《OGRE!!》

美香がオーガメモリを起動させた。

ガイアウィスパーが響き、オーガメモリを腕にある生体コネクタに挿す。

メモリは体内へと消え、美香は超人形態となった。その姿は正に鬼。

二本の角、鋭い牙と爪、隆々たる肉体。

「ストーカーにあったあんたには復讐の権利はあった。しかし――」

「――」
莊悟は、懷からバツクル状態の『ロストドライバー』を取り出した。

「越えてはならない一線を越えた」

ロストドライバーからベルトが伸び、莊悟の腰に巻き付いた。
ソフト帽を左手で掴み取り、右手はスーツの懷から黒いガイアメモリを取出した。

「変身」

《SKULL!!》

起動させたスカルメモリをロストドライバーのメモリスロットに
インサートし、メモリスロットを倒す。

すると、重低音が響き、莊悟の周囲を黒い風——ガイアアーマー——
I——が包む。

そして、風が止むとそこには莊悟は居なかった。 銀色に煌め

く骸骨の頭部に黒い複眼。

ガイアアーマー

黒の装甲を纏い、首にボロボロのスカーフを巻いている。

額の中央を走る『S』の模様。

それを左手で持った白のソフト帽で隠した。

「さあ、お前の罪を数えろ」

そこに居るのは——罪人を裁く罪人。

骸骨の戦士、仮面ライダースカルが居た。

「罪！？ 罪なんて私は犯してないわ！ 私は正しいことをしているのだから！ アッハハハ！！！」

オーガドーパントは鋼鉄さえ切り裂く爪を振るう。

スカルはそれを最小限の動きで躲すと、回し蹴りを放つ。

「はっ！！」

スカルの回し蹴りはオーガドールパントに直撃して吹き飛ぶ。

「ぐあっ！？」

宙に舞う巨体。

スカルは逃さず間合いを詰め、嵐の如く拳と蹴りのコンビネーションを見舞う。

オーガドールパントは防御すら敵わない。

「あああっ！！！！」

オーガドールパントの衝撃波を伴う咆哮にスカルは、後退を余儀なくされた。

これを機とみたオーガドールパントは、両腕を振るい貫通力抜群の爪を弾丸のように飛ばした。

速度、威力ともに脅威となる攻撃。

しかし、スカルは銃型ガイアウェポン『スカルマグナム』を構え、ガイアエネルギー弾を撃った。

「何！？」

スカルはオーガドールパントの爪を漏らすことなく、全てを撃ち落とした。

驚愕するオーガドールパントを気にすることなく、スカルマグナムは火を噴いた。

「がああああっ！！！！」

炸裂したガイアエネルギー弾はオーガドーパントに大ダメージを与えた。

オーガドーパントの大半の装甲には輝^{ひび}が入り、動きも目に見えて鈍くなっていた。

スカルはその隙を逃さない。

《SKULL！！ MAXIMUMDRIVE！！！！》

メモリスロットからスカルメモリを抜き、スカルマグナムのマキシマムスロットにスカルメモリをインサートした。

MAXIMUMDRIVE——ガイアメモリの力を最大限に引き出し、『必殺』の攻撃を可能とする。

「ギルティーシュート」

スカルマグナムから、より強力なガイアエネルギー弾が放たれた。その一撃は莫大な量の光を放ち、オーガドーパントに直撃した。

「ああああああっ！！！！！！」

オーガドーパントは爆散した。

やがて煙が晴れ、そこには体内から排出されバラバラになったオーガメモリと、横たわり苦しむ美香の姿があった。

「痛い！ イタい！ いたい！！」

ガイアメモリはその強大な力と引き換えに、メモリが内包する毒素——人の悪意を増幅する作用や肉体を崩壊させる作用——に

蝕まれる。

『ドライバー』と呼ばれる道具は、直挿し（生体コネクタ）より性能は劣るがガイアメモリの毒素から守るためのフィルターとしての役目もある。

ガイアエネルギー、ガイアメモリから受けたダメージは医療や魔法医療でも治すことは出来ない。

本人の回復力だけが頼りなのである。

だからこそ、ドライバー無しの『変身』は自殺に等しく、また麻薬より依存性も肉体への害も高く、直挿しは犯罪行為として厳しく取り締められる。

「た、助けて!!」

美香は涙塗れの顔で懇願する。

しかし、莊悟は表情を変えことなく一蹴した。

「無理だな」

莊悟はそのまま美香に背を向けると、歩き出した。

「いやああああああっ!!!! 死にたくないっ!!!!」

美香の全身に黒い斑点が浮かび上がる。

悲鳴とともに全身が黒く染め上がり、黒に飲み込まれた。

そして、美香の気配が背後から消えると呟いた。

「……最後まで己の罪とは向き合わなかったか」

黒に飲まれた彼女が、そこに居たという形跡は無い。
骨一本、髪の毛一本も残らず消滅したのだ。

「お前の罪を数えろ．．．あの世でな」

莊悟は黙祷すると、静かにその場を後にした。

第3話「Nとの出会い／子供先生」（前書き）

いろいろと省きました。

原作とは若干（？）違うキャラ多数です。

第3話「Nとの出会い／子供先生」

イギリス某所にあるメルディアナ魔法学校。

ここは魔法使いたちが『立派な魔法使い（マギステル・マギ）』となるための最初の関門だった。

ここでは、現在卒業式が執り行われていた。

「卒業証書授与・・・代表、首席ネギ・スプリングフィールド」
「はい！」

魔法使いのローブを纏った赤髪の少年——ネギは、元氣良く返事した。

年の功は11歳。

上は20歳までいる中で最年少にして首席卒業を決めたネギは、通常では8年かかる所を飛び級で5年で卒業まで漕ぎ着けた。

ネギの横には次席であり、一つ年上の幼なじみで赤髪の少女がいた。

少女は『アーニャ』の愛称で呼ばれており、本名を『アンナ・ユリエウナ・ココロウア』という。

二人はどちらも『天才』と呼ばれており、他の学生よりずば抜けて成績が良かった。

卒業式を終えたネギとアーニヤは、二人の保護者であるネギの従姉——ネカネ・スプリングフィールドと3人で通路を歩いていた。

「ネギ、あんた何て書いてあった？ 私はロンドンで占い師よ」

これから卒業生たちは『立派な魔法使い』となるために魔法を使った実地訓練（修業）を3年間行うのだ。

卒業証書には、魔法で隠蔽しているが修業場所とそこでやることが書かれている。

魔力を加えると文字が浮き上がる仕様だ。

「ちよつと待つて。今、見えるようになること」

三人は卒業証書を覗き込む。

そして、浮かんだ文字を読んだ三人は揃って絶叫を上げた。

「「「ええええ！？」」「」」

《学園生徒の皆さん。始業ベルまで10分を切りました。急ぎましょー！》

魔帆良学園の通学路は30分前も人が多かったが、今は更に上を行く人混みでまるで祭りのようであった。

路面電車は人が溢れかえり、通学路を疾走する者、自転車を漕いでいる者等様々であるが、その誰もが急いでいた。

「やばいやばいー！！ 今日早く出て荘悟に送ってもらったのに！！」

神楽坂明日菜は友人——近衛木乃香と合流して、猛ダッシュしていた。

（全部ドーパントのせいよ！！）

明日菜は心の中で悪態をつける。

「でもさ、学園長の孫娘の木乃香が何で新任教師のお迎えまでやんなきゃなんないのよ？」

「スマンスマン」

明日菜の怒気を木乃香は笑顔で受け流した。

「にしてもアスナは足速いよねー。私コレやのに」

木乃香は履いたローラースケートに視線をやる。

「悪かったわね体力バカで」

明日菜はぶっきらぼうに言った。

そして、自らの横でふと風が舞い『何か』がそこに現れた。

「あー……あなたにかなりキツイ災いの相が出てますよ」

大きなリュックを背負っているにも関わらず、明日菜と並走して
そう言ったのは赤髪の少年——ネギ・スプリングフィールドだっ
た。

「え……？」

その言葉に明日菜は怒りよりも、言い知れぬ不安が過ぎった。

「学園長先生。一体どーゆーこと何ですか？」

『麻帆良学園で教師をすること』が『立派な魔法使い』になるた
めの修業と決まったネギと、迎えに来た明日菜と木乃香は麻帆良学
園長室にいた。

「こんな子供に先生をさせる何て……」

「まあまあ、いろいろと事情があるじゃよ」

異様に細長い顔を持つ老人で麻帆良学園学園長——近衛近右衛
門は飄々と答えた。

「それにしても修業のために日本で先生を……そりあまた、大変な課題をもろたの」

「は、はい。よろしく願います」

明日菜と木乃香は二人の会話の意味が解らず、頭上にクエスチョンマークを浮かべている。

「まずは教育実習生からじゃのう。今日から3月までじゃ……」
「頑張ります！」

「その意気や良し。しかし、この修業が失敗したら故郷に帰らねばならん。二度とチャンスは無かるうて……その覚悟はあるのじやな？」

学園長は鋭い眼光でネギを見る。

その眼光を受けても決して目線を反らさない。

「はい！！ やらせて下さい！！！！」

ネギは真つすぐに、逃げずに強い意思を持って答えた。

「……うむ。わかった！！ では今日から早速やつてもらおうかの。まあ初日から焦らんでもよい。お互いに自己紹介程度で済ませてよいぞ」

「解りました」

「さて、指導教員のしずな先生を紹介しよう。——しずな君」
「はい」

学園長室の扉が開き、包容力溢れる知的な眼鏡美人が入ってきた。

「解らないことがあつたらしずな君に聞くといい」

「よろしくね、ネギ先生」「はい。よろしく願いします！」

ネギは深々とお辞儀した。

「そうそうもう一つ。このかとアスナちゃん、しばらくネギ君をお前たちの部屋に泊めてもらえんかのう。まだ住むところが決まったらんのじゃよ」

「ええよ。この子かわえーし」

木乃香は即答した。

「……解りました」

明日菜は渋々といった感じで答えた。

彼女は子供が好きではないが、いろいろと世話になっている学園長の頼みを無下に断る事はできなかったのである。

三人としずなが出て行き、しばらく経った時に学園長室の扉がノックされた。

「入ってくれ」

学園長に促され、扉の前にいた人物が学園長室に入った。

「失礼します」

学園長に促され、扉の前にいた人物が学園長室に入った。

その人物は、白いスーツに黒のワイシャツ、白のソフト帽の少年

—— 鳴海 莊悟であつた。

「わざわざ来てもらつてすまんのう」

「いいえ」

「して今朝のドーパントは『白』かろう？」

「間違いなく」

麻帆良学園ではガイアメモリ犯罪——ドーパントによる犯罪——
——が近年多発していた。

ドーパントは『魔法使い殺し』と恐れられ、一流と呼ばれる魔法
使い、氣術使いでも倒すことが出来ない程に対魔法・氣防御が高い。

また、それぞれの持つ特殊能力は実に強力なものばかりだ。

目には目を、齒には齒を、ガイアメモリにはガイアメモリを。

だからこそ、管理者として学園長はガイアメモリ犯罪の専門家と
言つていい莊悟に、ガイアメモリ犯罪が起きた場合に対処する契約
を交わしていた。

また、学園長が直接依頼することがなくとも発生した事件におい
て、最低限の情報提供をすることを約束していた。

「そうか。ワシの用件は終わりじゃ、菓子でも食つていかんか？」

わずか数秒の確認作業。

しかし、この内容を携帯で話して盗聴される訳にはいかない。

表向きでは、『敵』のガイアメモリによる工作の動きには気がついていない事になっているからだ。

いざという時にこちらが優位に立つために。
だから、莊悟は直接話に来たのだ。

「結構です。俺はこれで」

莊悟は学園長室を後にした。

「つれないのう……」

学園長はお茶をすすりながら、貫禄たっぷりの若き名探偵の背中に苦笑した。

第4話「Nとの出会い／名探偵と魔法先生」（前書き）

短いです。

あと・・・木乃香は扱いが難しい（喋り方がびみょ）
（*）
（*）

第4話「Nとの出会い／名探偵と魔法先生」

それは運命の導きだったのだろうか？

父と父が出会ったように、息子と息子は出会った。『名探偵』

と『魔法先生』……二人は出会った。

麻帆良学園にある喫茶店『風車』のカウンター席で、鳴海莊悟はコーヒーを飲んでいた。

「よう名探偵」

「刀野さん」

麻帆良警察署の警部——とつのあけお刀野明夫が莊悟の横に座った。

彼は風都署に続き新設された『超常犯罪捜査課』に所属していた。超常犯罪捜査課とは、ガイアメモリや魔法等による犯罪に対抗するために先月出来たばかりの部署である。

その部署は、構成員から活動内容まで全てがトップシークレットであった。

「探偵殺しで俺たちが目を付けた女が昨日から行方不明になったんだ。そして、所持品のバックだけが見つかった。——メモリの毒

素か？」

莊悟は軽く頷いた。

刀野に限らず、超常犯罪捜査課の警察官はガイアメモリや魔法に關しての知識を持つ。

そして、警察も不自然な点が多かった探偵の連続失踪事件にガイアメモリや魔法が絡んでいるのではないかと疑い、その線でも捜査は行われていた。

所持品の中にはガイアメモリ使用時に必要な生体コネクタを身体に付けるための道具があり、ガイアメモリ犯罪であることを警察は確信した。そして、戦闘があつた形跡があり、女が行方不明になつた。

ならば、ガイアメモリのメモリの毒素に『喰われた』と判断するのは難しくない。

「そうか。課長には女は『原因不明の失踪』したと伝えておくさ」

ガイアメモリ事件では、『原因不明の失踪』として処理される事が多い。

その方が何かと都合が良いのだ。

「助かったよ、名探偵。今度なんか奢るわ」

そう言つと、刀野は席を立ち店を出た。

日が落ちかける時刻。

コーヒーを飲み終わり、勘定を済ませて店を出た莊悟は何気なく声がした方向に目線を向けた。

「もう〜〜今日もバタバタの一日だったじゃない!!」

「すみませんご迷惑ばかりかけて……」

明日菜と木乃香と、赤髪の少年がいた。

「……でも、何で助けに来てくれたんですか？」

赤髪の少年が不思議そうに聞いた。

「あんたじゃなくて本屋ちゃんを助けたのよ」

「……あ、そ、そうですね」

赤髪の少年がしょぼんとすると、明日菜は少年を激励するかのようになんげ強めに背中を叩いた。

「もっとしつかりしなさいよ！ 先生!!」

「は、ひゃいつ!」

少年は軽く驚き、やがて名簿を取り出して何かを書き込んだ。

その表情から察するに、良い事を書き込んだのだろう。少年が名簿に何かを書き込んだ事に気がついた明日菜は、少年に詰め寄った。

「あ、ちょっと今名簿に何書き込んだのよ！ 見せなさいよー！」

明日菜が名簿を盗ろうとするのを少年は必死に防ぐ。

「え、いや。これはただのメモ書きで……」

「えー何々？ 私にも見せて」

木乃香がのほほんと言う。

「あれ？ あの人って確か」

木乃香が明日菜をつつく。

「何よ？」

「あの人って……莊悟さんやあらへん？」

「ん、そうみたいね」

「莊悟？」

少年が知らない名前だった。

「鳴海探偵事務所のイケメン探偵で名前は鳴海莊悟さん。ちなみに、鳴海探偵事務所はアスナのバイト先なんよ」

「鳴海……！？」

その名を聞いた少年は、莊悟に向かって急に走り出した。

「どうしたのよ！？」

少年は明日菜に構わず走り、莊悟の前まで来た。

「ん？ どうしたんだ？」

「あ、あなたはもしかして鳴海荘吉さんの息子さんですか！？」

「ああ、そうだが」

「やっぱり！ 僕はネギ・スプリングフィールドっていいます！
是非ともあなたに聞きたい事があるんです！！」

「なんだ？」

「僕のお父さん、ナギ・スプリングフィールドの行方を知りませんか！？」

互いに偉大なる父を持ち、『英雄』と呼ばれる事になる二人の出会いはこんな会話から始まった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4175r/>

仮面ライダーズカルIN麻帆良～鋼鉄の意思を継ぐ者～

2011年3月29日15時09分発行